

浜風会/入会募集中
毎月第1,3木曜日

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会/浜風会会報 No.28

篠原地区の秋葉山の調査

篠原地区の秋葉山の調査を浜風会会員が手分けして行った。所在確認だけでなく、建立の時期、設置場所移動の履歴や現在の祀り方なども聞き取り、今後のための記録になるように心掛けた。調査結果から見えてくるものを掲げてみたい

秋葉山は少し前までの字単位で祀られていて、篠原町19か所、坪井町4か所、馬郡町の東馬郡2か所の合計25か所にあり、形態は下表の通りである。篠原町で近年統合された所が1か所あるが、それ以外は昔のままである。堂の中に灯籠がない秋葉山が多くあるが、地震で壊れたものもあるだろう。特異な形態として、西国方、東国方、鳥守と西茶屋では堂の中に秋葉山と津島神社を並べて祀っていて、堂の中には石灯籠はない。ここを国方では「鎮守様」と呼んでいる。

秋葉山の形態

	灯籠と 鞆堂	鞆堂 だけ	灯籠 だけ	計
篠原町	5	10	4	19
坪井町	3	1		4
馬郡町	2			2

（一七九六）から四年間に建てられている。この頃に秋葉灯籠を建てるのが流行したと言われている。

現在の堂は全て昭和に建てられたものであるが、秋葉灯籠に鞆堂たづみどうが建てられたのは、文政三年（一八二〇）頃からで、これも流行のようであった。これを物語るような古い棟札は見当たらなかった。

調査聞き取りをしていくと、秋葉山は動いていることが解る。例をあげると、坪井西組のもの昭和二十年代までは旧東海道沿いにあったが、四十年代に東光寺山門東側に移り、現在は西側に設置されている。東海道沿いから離れた所へ移動しているものは、他に立場東山と本村がある。秋葉山の多くは個人の屋敷の一面に設置されていたことから、道路の拡幅や屋敷の整理などにより移動を余儀なくされ、神社や寺の敷地に移った。現在の設置場所が神社に接し



田畑秋葉灯籠 屋根のような
笠の灯籠 大正7年建立

ているものが5か所、寺に接しているものが7か所あり、全数の半分近くもある。

秋葉山の世話は、ほとんどは一年の廻り番となっていて、年末にお札の入替をしてのほろはた幟幡を立て、さらに秋祭りも立てるのは全ての部落で行われている。また西国方では非常に丁寧な世話をしている、月の一日、十五日には掃除をし、浜砂を取ってきて清め、神とお洗米をあげている。

ここは部落の人のお参りも多いと聞く。

幟幡の文字は「奉納秋葉大権現」「奉納秋葉神社」「奉納秋葉山」など色々あるが、「大権現」を入れたものが多い。幡竿の先に笹の先端を指すのはどこも同じである。

今回多くの秋葉山を見てきたが、どれも歴史を感じさせる文化財だと感じる。みんなで関心を持ち続けたいものである。（鈴木忠）



幟幡があがった三分一の秋葉山

「鈴木姓」は篠原に何故多い？

「鈴木姓」は全国的に1位、2位を争って多いと言われている。浜松市でも約7%で最も多いが、篠原町に至っては何と約38%と圧倒的に多いのである。それはどうしてだろうか。

「鈴木姓」に関する文献を前提にして、「鈴木姓」が篠原に多い理由を推察してみた。
(次頁「鈴木姓の由来と時代的分析」参照)

一、篠原地区に伝わる言い伝えから

(鈴木琢磨氏所蔵の元祖由来秘書等)
・紀州名草郡藤代村出身、鈴木伊勢二郎重家の息子、鈴木喜内左衛門重信が篠原における鈴木家の始祖と言われている。

・大地震大津波によって、長里郷より鈴木六太夫らによって当地に牛頭天王社や神明社を移し奉ったと言われている。

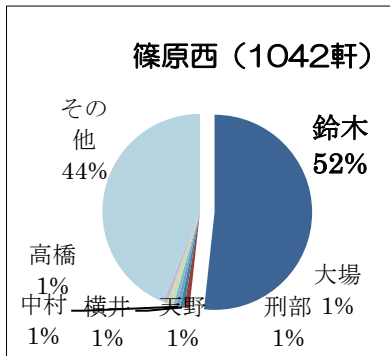
二、分析的調査から

①自治会名簿(昭和17年)調査

「鈴木姓」が特に多い篠原西自治会では、52%を占めるが、中でも小字の権現、西茶屋、西国方、鳥守、東国方では60%を超える多さである。

②寺院の檀家名簿調査

名字は祖先からの継承だからと同時に、名字のことは江戸時代に行われていた「寺請制度」の影響があるのではないかと考え、寺院のご協力を得て調べてみた。



熊野は、ゆるやかな自然信仰の聖地に新たな仏教文化が入って、平安の頃より神仏習合思想

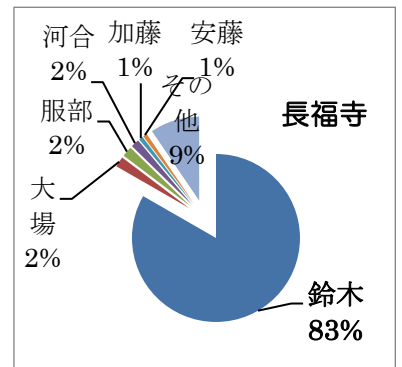
篠原地区には合計12寺

あるが、篠原西に位置する代表的な長福寺では、何と83%が鈴木姓で占められている。道に沿って並んでいる興福寺、宝林寺も同様

際立って多いことがわかった。これは篠原に「鈴木姓」の多い大きな要因だろう。

③鈴木姓の発祥の地、熊野を訪ねて

「鈴木姓」の多さを調べるに当たって、和歌山県田辺市の熊野本宮大社、同海南市の藤白神社及び鈴木屋敷を訪ね、宮司さん始め語り部の方に鈴木姓の発祥に関係するお話を伺ってきた。



が多くの人に受入れられている姿に感銘を受けた。世界遺産に選ばれた魅力がそこにあるのではないかと。三、まとめ(鈴木姓が多い理由) 以上の調査から、篠原の「鈴木姓」のルーツは熊野にあると言いうことはわかった。しかし篠原地区には熊野神社は存在しない。どうして多いのかの理由にはなり得ないのではないかと。そこでもう一度篠原地区の足元を良く見てみよう。他にない特殊な事情があるのではないかと。そこで出た結論が以下のとおりである。

① 篠原には早い時代から、多くの人が住んでいた。おそらく室町時代に入植した人達によって、共同で短い時間に開拓した。そのリーダー、鈴木さんの名字に做ったのではないかと。次頁の地図がそれを物語っている。

② それには安心して多くの人が住める広い面積の土地があった。砂州・浜堤の跡である。後年東海道線が敷設されたように、周辺から少し高い土地で、浜名湖東岸、当時河岸があり交通は至便であった。

③ それを裏付けるように篠原にはお寺、お宮が多い。特に西神明神社から東へ、興福寺、長福寺、宝林寺、篠原寺へお寺が連なり、更に当時の牛頭天王社(現八阪神社)そし



④ それに相俟って制度上のタイミングが、鈴木姓が多いことに寄与した。

- ・土地を所有する仕組み
- ・寺請制度（宗門人別調帳）
- ・戸籍制度の開始（壬申戸籍）
- ・平民苗字許可令

多くの人が由緒ある「鈴木姓」を名乗り始めたことが想像出来る。

(山下勝彦)

て玉蔵寺、保泉寺と続いている。多くの人々がこれら神仏に癒しを求めていたことが思われる

鈴木姓の由来と時代的分析 (篠原地区における鈴木姓に関係する要素を年代順に配置した)

『篠原村誌』口碑伝説／『浜風と街道』伝説と由来 鈴木六衛門家／保泉寺の「元祖由来書」	西暦／時代	寺院の開山／神社の勧請 (参考：篠原の全神社寺院を表した) <国の政策等>
篠原鈴木とは如斯 1189 文治 5 年、紀州名草郡藤代住也の鈴木三郎重家の安否を心配して重家の妾は 7 歳の倅、宮太郎を連れ東方へ、旅宿を超えて橋本宿に宿す処、飛脚に夫が絶望である報に触れ、途方にくれた。この里の後藤佐権太宅にお世話になり、家内同様に暮らす	1100 平安 鎌倉	<743 天平 15 墾田永年私財法制定> (コメント) 開墾で土地を所有する経過については割愛 <荘園制度>
1212 建暦 2 年、宮太郎は後藤佐権太の孫娘を妻に迎え長里郷に新居を構え、 鈴木喜内左衛門重信と改めた。これが鈴木家の始祖なり。 その後、子孫は増え続けたが	1200 鎌倉 1300 鎌倉	1212 建暦 2 年 東神明宮・西神明神社勧請 1381 永徳元年 東本徳寺・西本徳寺開山 1395 応永 2 年 春日神社勧請
1412 応永 19 年、子孫の一人、 鈴木喜六郎重尚は、開墾のため今の篠原の地に移り住む	1400 室町	1440 永享 12 年 稻荷神社勧請
1498 明応 8 年／1510 永世 7 年、大地震、大津波により長里郷より当地に来る。17 人 1510 永世 7 年、鈴木六太夫は牛頭天王社を、鈴木藤太夫、鈴木惣平、鈴木惣十は神明を西篠原の地に移し奉る	1500 室町	1510 永世 7 年 牛頭天王社勧請 1530 享祿 3 年 長福寺開山 1533 天文 2 年 玉蔵寺開山 1564 永祿 7 年 善養寺開山 1589 天正 17 年 海蔵院開山 1591 天正 19 年 万松院・宝林寺開山
(コメント) ・鈴木喜六郎重尚が篠原に住み始めた頃、既に篠原地区には東に、西に人が住んでいた。 ・東神明宮・西神明神社、東本徳寺、西本徳寺が勧請／開山されていたことでわかる。 ・その重尚は篠原東の地に、そして約 100 年後、大地震大津波で来た人達は、篠原西の地に住み始めたと考えられる。	1600 江戸	1600 慶長 5 年 光雲寺開山 1601 慶長 6 年 東光寺開山 1604 慶長 9 年 保泉寺開山 1608 慶長 13 年 如意寺開山 <1612 慶長 17 年 禁教令> <1671 寛文 11 年 宗門人別改帳>
	1800 明治	<1867 慶応 3 年 大政奉還> <1871 明治 4 年 氏子調規則> <1872 明治 5 年 戸籍制度> <1873 明治 6 年 氏子調廃止> <1873 明治 6 年 地租改正法> <1875 明治 8 年 平民苗字許可令>

舞阪駅周辺雑感

私の地元舞阪駅周辺は、大きな変化をみせてきた。感慨深いものがあるので所感を述べる。

舞阪駅は明治21年(1888)、官設鉄道浜松駅〜大府駅間が開通したが、その開通時に馬郡駅として開業した。その時点では浜松駅と豊橋駅の間には馬郡駅と鷺津駅の二つしかなかった。

馬郡駅は明治24年(1891)舞坂駅に改称(舞坂町史)、昭和15年(1940)舞阪駅に改称された。舞阪駅には貨物列車の引込線があったが、昭和46年(1971)に貨物の取扱いが廃止された。

平成15年(2003)、浜名湖花博関連事業の一環として舞阪駅の南北の区画整理が実施され、橋上駅舎、南北自由通路が完成し、現在に至っている。舞阪駅の所在地は馬郡町であり、敷地の大部分は浜松市馬郡町で、駅の西側のほんの一部だけの敷地が舞阪町であるのに駅名は「舞阪駅」となっている。舞阪駅前には「停車場」と言われていて、舞阪駅は馬郡町駅前自治会に属している。



橋上駅になった現在の舞阪

吃水の浅い船で産物が運ばれてくる集積地であった。

その後、鉄道が開通した明治21年から大正時代にかけて、舞阪駅周辺には、銀行、郵便局、養鰻場、製氷工場、織物工場、製材所、旅館、劇場、カフェ、ピリヤードなどがあった。今でも駅前

の狭い範囲には4軒の酒屋がある。舞阪駅前に遠洋銀行本店(後に静銀に統合)が設立されたのが明治

30年西遠(株)は現在では不動産賃貸業(ママに賃貸)となっているが、元は織物工場で大正8年の設立、養

鰻池を営業している(株堀内商店は大正11年に設立されている。

戦前にはコロムビア工場(戦時中は軍需工場、戦後は日畜と呼ばれた)があり、舞阪駅を利用した通勤客で賑わった。

また舞阪駅南側の耕地整理は昭和5年に、

現在の春日神社本殿、拝殿の改築は昭和8年に行われたものである。

舞阪駅で忘れてはならないのは浜名湖の「うなぎ養殖」である。駅を利用し餌である冷凍魚が搬入され、生鰻が出荷されていた。

明治24年(1891)新居町の原田仙右衛門がうなぎ、鯉などの養殖を試みたのが浜名湖地方の養鰻のはじめと言われている。その後明治33年(1900)、服部倉次郎が舞阪駅付近から浜名湖を見て養殖の適地であると確信し、舞阪町で現在の(株)服部中村養鰻を開場し、スッポン、ウナギなどの養殖が始まった。大正10年

(1921)、公有水面埋立法が公布されると浜名湖の湖面活用が図られ、養鰻池造成が激増した。浜名湖周辺の養鰻池も昭和40年代の最盛期は営業面積850町歩、450軒の営業体があったが、現在は30軒に激減している。とは言え、浜名湖のうなぎのブランドは健在で、浜名湖養魚漁業組合はトレーサ

ビリティー(養殖生産履歴情報開示)を実施し、食の安全に取り組んでいる。

今後共舞阪駅周辺の発展を祈り、見守っていききたい。(堀内國夫)

浜風会会報第28号
 篠原協働クラブ同好会「浜風会」
 (篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
 編集委員 委員長 山下勝彦
 鈴木幹久 鈴木忠 藤田博辞
 発行責任者 山下勝彦
 発行平成28年1月1日
 連絡先：浜松市篠原協働クラブ 気付